

中山間集落住民にとっての買い物の意義 —鳥取県内の調査を中心に—

磯野 誠 公立鳥取環境大学

1. 調査背景と目的

近年、国内各地の地方都市や中山間地域において、買い物弱者問題が一種の社会問題として顕在化している(経済産業省 2010;岩間 2011)。その買い物弱者問題に対して、これまでの行政による取り組みとは主に、地理学、流通政策、交通政策、都市計画・まちづくりの観点からの調査研究と対策提言をもとにしたものである(高橋・武田・大内 2012)。そこではその焦点は、社会的環境変化の中で拡大してしまった、食料品等商品と消費者の間の地理的・空間的ギャップをいかに埋めるかにあるといえる。

一方で買い物行動とは、消費者行動研究の観点からは、生活に必要なものを買ひ揃えるといったような功利的動機に加え、買い物自体を楽しみたいといったような快楽的動機に基づくことが説明される(堀内圭子 2004)。しかしこれまでの買い物弱者問題に関する先行研究においては、そのような快楽的動機に関わることはいわば買い物の副次的産物として扱われていて、それ自体の意義や効用を考察するものは見当たらない。中山間地域や地方都市に住む人にとっての買い物自体の性質を理解し、その意義を考えることは、買い物弱者問題に対する、あらたな意味のある対策提案に結びつくものと考えられる。そこで本稿はその買い物弱者問題対策の一助となるべく、中山間集落住民に焦点を当て、彼らにとっての日常生活上での買い物の意義を、快楽的買い物行動の観点を含めた上で考察した。

2. 調査課題と調査方法

本調査課題を次のように設定した。(1)中山間地域住民にとっての、日常生活上における買物の意義とは何か。(2)特にその快楽的側面、功利的側面とは何か。本課題に取り組むにあたっては、中山間地域住民の生活環境条件、生活に対する価値観、性格等、およびそれらが形成する彼等の生活スタイルを含めた生活全般のコンテキストを踏まえる必要があると考え、定性訪問インタビュー法(半構造化)を採用した。調査対象として協力頂いた住民は、鳥取県内のある中山間地区集落に住む6人であった。対象者の年齢は、70歳代前半から80歳代後半にまたがり、男性と女性を含んだ。調査の対象となった集落とは、典型的な中山間地域にあり、これから移動販売の実施が予定されているものの、2014年現在では未だそのような対策は及んでいない地域であった。調査は2013年10月31-11月4日にかけて実施された。

3. 分析と考察

3-1 中山間地域住民にとっての目標としての「一病息災的健康」

まず中山間地域住民にとっての買物の意義を考える際に、住民にとっての日常生活上の目標あるいは理想として、今回のインタビュー結果をもとに、三徳・高橋・星(2006)の「一病息災的健康」(主観的健康感(自分の健康に対する感覚)と実際の病気や痛みの数の構成)と設定した。その上で買い物が、彼らの「一病息災的健康」にどのように貢献するのかを検討した。ここで三徳・高橋・星(2006)は、高齢者の健康を構成する因子の影響関係を明らかにするものであり、高齢者の「社会参加」(旅行、趣味、地域活動、収入から構成)が「生活能力」(外出頻度、散歩、運動等から構成)の活性化に結びつき、さらにそれが「一病息災的健康」を高めること、また「一病息災的健康」とは、実際の病気や痛みの数、主観的健康感、昨年同様元気から構成されるが、主観的健康感がより強く関連することを示している。そして今回のインタビュー調査結果から解釈できる、中山間地域住民の「一病息災的健康」、その起因となる「生活能力」と「社会参加」に対する買い物の意義として、次を指摘することができる。

3-2 「一病息災的健康」をもたらす要因としての「生活能力」と、買い物

まず「一病息災的健康」とは直接的には「生活能力」に起因するとされるが(三徳・高橋・星 2006)、その「生活能力」に対して買い物とは、それに伴う移動や動作が適度であれば、その維持・向上に結びつくことが考えられる。今回の調査において、片道20-30分をかけて市内のスーパーに行くことや、時間をかけて売り場まで移動すること等も、彼ら自身にとっては適度な運

動として捉えられている場合が多く見受けられた。ただしもちろん一方で、そのような買い物に伴う移動や動作が過度な負担となる場合もある。例えば移動販売での3段ほどのステップの上り下りは危険で負担と感じられていることもあった。

また買い物の効用に対する従来の見方である、功利的ニーズの充足は、「生活能力」、そして次の「社会参加」の維持・向上に結びつくと思えることができるだろう。

3-3. 「一病息災的健康」をもたらす要因としての「社会参加」と、買い物

また「一病息災的健康」とは、「生活能力」を通じた「社会参加」に起因するとされるが(三徳・高橋・星 2006)、買い物には社交の側面があり、それは「社会参加」であるといえる。今回の調査においても、加藤(2011)、森(2010; 2011)、矢吹(1999)等の先行研究が指摘してきたように、買い物が同時にその人にとっての人と話すことや、一緒に時間を過ごす機会となっている場合が多く見受けられた。例えば、市内の友達や子供に会うために移動するがそのついでに買い物をし、市内までバスで買い物をし友達と一緒に歩く、移動販売での買い物のついでに、しかし移動販売が去った後もずっと近所の友達と話をし、といったようなことが聞かれた。これは Arnold and Reynolds (2003)、井上(2007)が快楽的買い物動機の一側面として示した「社交型」に当てはまる行動といえるであろう。

また買い物には、リラクゼーションや役割遂行の側面があり、それはまた「社会参加」の一側面であるといえる。今回の調査において例えば、パンやお菓子など欲しいものを買う、孫にあげるものを買う、クリスマス等にはケーキを買う、何か買うのはストレス解消になる、といったようなことが聞かれた。これは Arnold and Reynolds (2003)、井上(2007)が快楽的買い物動機の一側面として示した「リラクゼーション型」、「役割遂行型」に当てはまる行動といえるであろう。またむしろ日常生活に必要な、野菜やお米などは集落内で取れるものなので買う必要はないといったことも聞かれた。

4. おわりに

以上、本稿では、中山間地域住民にとっての買物の意義を捉えることを意図し、そのような住民を対象とした定性インタビュー調査を行った。その結果として得られた知見として次をあげることができる。すなわちまず中山間地域住民にとっての日常生活上の目標を、三徳・高橋・星(2006)の「一病息災的健康」と設定するとき、それは「生活能力」と「社会参加」に起因するが、(1)買い物に伴う移動や動作が、「生活能力」の維持向上に結びつき得ること、(2)買い物に伴う功利的ニーズ充足が、「生活能力」と「社会参加」の維持向上に結びつき得ること、(3)買い物に伴う社交が、「社会参加」となること、(4)買い物に伴うリラクゼーションや役割遂行が、「社会参加」となること、である。今回中山間地域住民による買い物動機においても、功利的側面と快楽的側面があり、特にその快楽的側面は、「一病息災的健康」の起因となる「社会参加」に結びつくことが考えられる。買い物とはそもそも商品と消費者の間の地理的・空間的ギャップそしてそれに伴う心理的ギャップの行き来を内在する部分があるが、消費の快楽的側面、すなわち今回の調査で見られた社交、リラクゼーション、役割遂行等とはそのギャップの行き来によってもたらされると見ることもできる。その見方に立てば、買い物弱者支援においても、買い物に内在するそのギャップの行き来の適切な管理が求められることが示唆される。

参考文献

- Arnold, M. J. and Reynolds, K. E. (2003) "Hedonic Shopping Motivations," *Journal of Retailing*, 79(2), pp.77-95.
- 井上綾野(2007)「快楽的動機と支出行動」『目白大学経営学研究』、5号、pp.63-74。
- 岩間信之(2011)「フードデザート問題と地域コミュニティ」『生活協同組合研究』、2011/12、pp.23-30。
- 加藤司(2011)「地域商業の活性化とまちづくりの課題」『生活協同組合研究』、2011/12、pp.13-22。
- 三徳和子、高橋俊彦、星旦二(2006)「高齢者の健康関連要因と主観的健康感」『川崎医療福祉学会誌』、15(2)、pp.411-421。
- 高橋愛典・武田育広・大内秀二郎(2012)「移動販売を捉える二つの視点」『商経学叢』、58(3)、pp.435-359。
- 森傑(2011)『「まちの整体」から震災復興への展望』『生活協同組合研究』、2011/12、pp.31-40。
- 森傑(2010)「道内過疎地での住民生活と地域づくりの課題」『生活協同組合研究』、2010/9、pp.35-49。
- 矢吹雄平(1999)「郵便局を“戦略変数”とした“地域マーケティング”」『岡山商大社会総合研究所報』、20号、pp.193-206。
- 堀内圭子(2004)『＜快楽消費＞する社会』中央公論新社。
- 経済産業省(2010)『地域生活インフラを支える流通のあり方研究会報告書』。